織田政権と越前一揆の攻防

竹間芳明

はじめに

天正三年（一五七五）八月、織田信長は本願寺から越前を奪還した。越前を制圧した信長は、柴田勝家等の部将を越前支配に当たらせることになり、[1]勝家の養子勝豊は、坂井郡の「豊原之城」を与えられた。[2]

「豊原之城」は、越前本願寺政権が陣所とした天台宗の古刹豊原寺跡に築城されたものか定かではなく、正確な場所は特定できない。豊原之城の近くに丸岡城が築城されたが、その築城年代も不明である。[3]

一方、信長の越前再征後も加賀との国境に位置する大野郡の山間部では、北袋一揆・山中五ヶ村一揆が抗戦を継続していた。[4]天正四年（一五七六）五月には、大規模な一揆が越前で蜂起したが鎮圧され、前田利家により生捕りにされた一揆勢千人余りが残虐な方法で処刑されている。[5]また、この年に、越前一揆の惣老等が上杉謙信に越前出馬を懇願している。[6]

翌天正五年（一五七七）一一月八日、勝家の一族で勝山の支配に当たっていた義宣が、大野郡皮合村の一揆勢の掃討に赴いたが、狙撃され討死したという。[7]柴田義宣に関しては、一次史料では確認できないが、後世に作成された「平泉寺落ゟ地頭附之覚」では、谷城に拠る一揆勢の頭目斎藤親左衛門が、天正五年春に柴田監物勝安を撃退し討ち滅ぼしたが、同年秋に柴田三左衛門勝政により攻め殺され梟首されたとある。そして、同じく頭目の梅田馬之丞は生捕りとなり晒され、一揆は鎮圧されたと記されている。[8]このように、伝承では大野郡の一揆勢は攻め滅ぼされたとされているが、柴田義宣の名や天正五年時の一揆勢の動向については、同時代史料では不明確な部分が多い。[9]そもそも、天正五年以降の対越前一揆戦の具体的な様相は、大野郡以外の地域を含めほとんど知られていない。そこで、

小稿では、わずかな史料からその過程を探ってみたい。

一　柴田勝家と北陸戦線

勝家は、伊達氏家臣遠藤基信宛の書状で、「北国表為警固、越前被居置候」、「此口為警固、越前令在国」と述べているように[10]、織田信長から北陸方面での軍事責任者として任ぜられていた。松浦義則氏は、勝家の課題として対上杉戦・加賀一揆戦に備える必要があったと指摘している[11]。

天正四年（一五七六）一二月、能登制圧を進めていた上杉謙信は、向背定まらぬ畠山氏重臣が拠る七尾城を包囲したが、翌天正五年（一五七七）に、関東に出陣するために一旦越後に戻ることになる[12]。この年の三月一日に、信長は以下の書状を記している。

七尾面謙信引退之趣、委細申越候、誠入情（精）注進悦入候、猶以実儀承合可申上之段専一候、漸可雪消候条、至賀州（江）進発不可有遅々候、次堅苦一桶到来、遙々懇情珍重候、猶武藤宗右衛門尉（舜秀）可申候也、

三月一日　（織田信長）（黒印）

（宛所を欠く）[13]

謙信が七尾城から退いたとの一報を受け、ようやく雪解けの季節になるので、加賀へ進発することを命じている。宛所を欠いているが、おそらく勝家等越前に配された部将達に宛てたものであろう。

天正三年の越前再征で、織田方は加賀南二郡まで侵攻したものの、天正五年五月四日付瀧谷寺宛堀江藤秀書状では、江沼郡檜屋表の戦闘で多くの負傷者が出たことが知れる。さらに、同書状には、七尾城から信長へ遣わした使僧と藤秀が大聖寺で面談したことが記されている[14]。『信長公記』巻八によれば藤秀は、織田方が構えた檜屋城・大聖寺城に配されていた。

謙信が能登に再出馬するのは同年閏七月である[15]。謙信は帰国の際に、河田吉久・栗林政頼・河田窓隣軒を残し、能登の石動山城の普請と守備を命じていたが[16]、能登に残された上杉方の将兵が加賀に侵攻する情勢ではなかった。六月八日時点で、謙信の出馬に先立ち河田長親等が能登鹿島郡大呑口で、放火をしたことを賞されていることからも[17]、堀江藤秀書状にある江沼郡での戦闘は、加賀一揆勢と織田勢の間で行われたものと判断される。すなわち、谷口克広氏が指摘するように、この時点でも、柴田勝家を指揮官とする織田勢は、北陸戦線で厳しい状況に置かれていたのである[18]。

三鬼清一郎氏は、天正三年（一五七五）から八年（一五八〇）頃までの織田政権の越前支配の実態は極めて脆弱なものであり、柴田勝家等が実際に確保していたのは北庄城など幾つかの拠点（居城周辺）にすぎなかったと思われると言及されている[19]。加賀はおろか、膝下の越前支配も決して安定したものではなかったとする指摘である。

次節では、谷口氏と三鬼氏の見解を踏まえて、越前における勝家等織田方の部将と一揆勢との攻防について具体的にみてみたい。しかし、一次史料だけでは、戦闘の詳細を解明しきれない[20]。そこで、後年の江戸時代初期に作成された軍功書も含めて検討対象とする。

二　加賀藩家老家臣団の武功書

竹井英文氏は、加賀藩家老本多政重・横山長知・山崎長徳が元和二年～三年（一六一六～一六一七）に作成し提出した家臣団に関する「戦功覚書」の謄本を翻刻紹介している。この写本は、石川県の著名な郷土史家森田平次（柿園：生没年一八二三～一九〇八年）が謄写した『秘笈叢書』（石川県立図書館「森田文庫」所蔵）に収録されているが、原本の所在は不明であるという。[21]

竹井氏により翻刻された三家老家の「戦功覚書」写のなかで、横山家と山崎家の一部の家臣が、対越前一揆戦について記しているので、該当部分をみてみよう。

「横山山城守家士武功書」[22]

［史料①］　弐百石　　斎藤内蔵助

一、私義、生国越前ニ而、信長之御代ニ越前大野郡金森法印江被下候砌、法印江奉公ニ罷出候、然処北袋与申所ニ国々牢人并一揆共申合、大野郡之内放火可仕之由申而、堺目矢戸山と申高山ニ多人数を以取あかり申候付、日根野備中・同弥次右衛門両人大将ニ而及合戦候、我等も其手ニ有合申間、首二ツ討取申候、一人ハ組討ニ仕候、右之様子存知候桜井五右衛門と申仁、今ニ有之候事、

織田信長は、越前再征後に金森長近に大野郡の内の三分の二を与えた。[23]斎藤内蔵助は長近に仕えたが、北袋で牢人と一揆が連合して大野郡で放火をしたうえで、境目の矢戸山に籠もったと記している。

矢戸山という山は確認できず、現大野市大矢戸の北に矢戸坂という峠道が存在する。[24]大矢戸は禅師王子山の西南麓に位置しており、この山に一揆勢は籠もったのだろうか。

一揆勢と戦ったとする日根野兄弟は、天正二年（一五七四）に長島一揆が殲滅されるまで、信長と敵対していた。[25]その後、信長に降り、天正六年（一五七八）一一月には、織田勢の部将として対荒木村重戦に参陣している。[26]

「遠藤記」・「秘聞郡上古日記」（『郡上八幡町史』史料編一）・「遠藤家旧記」（内閣文庫所蔵、『郡上郡史』に一部掲載）など後年に作成された遠藤氏の諸記録によれば、日根野兄弟は信長の越前再征時には、遠藤氏と共に奥美濃の郡上から大野郡へ攻め込んだとされる。そして、比較的史料として信頼性が高い「朝倉始末記」（『蓮如　一向一揆』岩波書店、一九七二年）では、信長は戦後処理の一環として、大野郡の支配に「金守・ヒネノ」を当たらせたとある。これらの諸記録から、日根野兄弟が当座の大野郡支配に関わっていた可能性が考えられる。

一次史料でも、正月三日に山中五ヶ村の一揆等が、大野郡の大納を攻撃し、金森方と戦ったことが分かる。また、二月一六日に長近配下の遠藤惣兵衛が折立称名寺に対して、対一揆戦のために下々の者が刀を購入してでも帯びるように指示を下している。五月二八日付の本願寺顕如書状では、北袋一揆が織田勢に対して抗戦を継続していることが確認される。いずれも年次は不明だが、織田信長の越前再征以後であると判断される。[27]すなわち、天正三年（一五七五）

以降も、大野郡では一揆勢が抗戦し続けていたのだった。

［史料①］の武功書から、北袋一揆が織田方の日根野兄弟と合戦に及ぶほどの規模だったことが想定される。だが、この合戦が行われた年・日付や結末は分からない。

［史料②］　五百石　　広瀬民部

一、私義、生国越前之者ニ而御座候、然者柴田修理殿越前入国候而、豊原与申所ニ柴田伊賀殿住城被仕候、然処越前河ゟ北一揆悉起申ニ付、高木之川端ニ而北庄ゟ人数出申候処、柴田源左衛門殿馬乗二・三騎、歩者以下二拾人許ニ而高木を河を越、伊賀守殿城へ懸付候へハ、一揆共取巻有之処を突割、城へ入申時、私首を討取申候御事、

先述のように、信長は越前再征後に柴田勝豊に「豊原之城」を与えている。[28] この武功書では、伊賀殿＝勝豊が豊原の地に在城中に、川より北で一揆が悉く蜂起したので、柴田勝家の居城北庄城から柴田勝定を主将とする軍勢が後詰めに向かったとある。そして、勝定等は高木（九頭竜川南側）から渡河して、勝豊の城に辿り着き包囲する一揆勢に攻めかかり突破して、入城したと記している。

北庄城の築城は、勝家が越前に入部した天正三年（一五七五）から開始されたが、九頭竜川より北で一揆が蜂起し、勝豊の城を包囲した年は書かれていない。

［史料③］　弐百石　　長屋喜右衛門

（前文略）

一、越前へ柴田殿入国之次之年、しつへ御手遣候跡ニ、一揆起申候而、本丸之塀迄付申候へ共、城中強候而、取継き申候時、我等ハ五兵衛殿屋敷之留守仕候へと被申ニより、一揆のき口をしらす高名仕候、柴田殿預御感申候御事、

勝家の越前入部の次の年は、天正四年（一五七六）である。勝家が軍勢を向かわせたという「しつ」とは、丹生郡の志津のことであろうか。この派兵の虚を衝いて、一揆が蜂起し城を攻撃したが、城中の兵は強く持ち堪え、一揆勢の退却を知らせたと記している。城は北庄城のことだと思われるが、天正四年時点で一揆勢が、本丸の塀まで迫るほどの激戦が行われたというのである。

［史料④］　弐百五拾石　　松山助左衛門

一、私本国越前、則朝倉式部大輔所ニ代々在之、子息土橋右近所ニ有之、越前之内於北袋谷之城、柴田殿責落被申時、首壱ツ討取申候御事、

松山助左衛門が代々仕えたとする朝倉式部大輔は、宗家朝倉義景を滅亡に追い込み、信長に服属して土橋信鏡と改名した朝倉景鏡のことである。信鏡は、天正二年（一五七四）四月に一揆勢に攻め殺され、一〇歳と六歳の信鏡の嫡子兄弟も斬首され親子三人の首が晒されたという。（「朝倉始末記」）

子息土橋右近とは、景鏡の庶子が生き延びていたのだろうか。管見では、土橋右近に関する記述は、松山助左衛門の武功書以外では確認できない。助左衛門は、この右近配下の部将として、北袋一揆が拠る大野郡の谷城攻落戦に加わったとするが、その年は分からない。

［史料⑤］　弐百石　　今井才右衛門

一、私義、柴田宮内殿家中ニ在之時、柴田殿越中椎の谷御働候跡ニ一揆起り、北庄城へ責入、塀ニ手を懸乗申候処、大窪忠左衛門・宇野丹助・私三人一所ニ有之、塀へ着申者塀際迄追落、忠左衛門致手柄申候、丹助ハそこニて鑓手負申候、私も忠左衛門同前ニ働申候、様子忠左衛門ニ被成御尋候御事、

柴田勝家が越中の椎の谷を攻撃している時に、一揆が蜂起し北庄城に攻め入り、塀を乗り越えようとしたが、防戦し塀際まで追い落としたとある。

越中に椎の谷という地名が存在していたことは確認できない。天正六年（一五七八）四月七日に、織田信長は神保長住に佐々長穐を添えて飛騨経由の越中侵攻を指令した。さらに、九月には斎藤利治が同じく飛騨経由で越中へ派遣され、一〇月に上杉勢と越中新川郡の太田・月岡野で戦っている。この戦いは、織田勢が優勢であったが、信長の部将荒木村重の離反により、一〇月二八日に利治は急遽帰陣を命じられている。[29]

この間、勝家自身は加賀侵攻を試みていたが、思うように進展していない。その後、天正八年（一五八〇）四月に金沢を陥落させ、一一月には加賀一揆の領袖を討取り首を安土に届けている。[30]同年九月に佐々成政が越中侵攻を命じられ、織田方は本格的に越中平定（対上杉戦）に乗り出すことになった。[31]勝家が越中戦線に出ることが可能となったのはこれ以降である。

抗戦し続けていた加賀山内一揆も天正一〇年（一五八二）三月に殲滅されている。[32]織田方が対上杉戦を優位に展開する状況下で、勝家膝下の北庄で一揆が蜂起することはありえない。以上の流れを勘案すると、椎の谷とは、越前の吉田郡志比の谷のことと判断したい。『金沢古蹟志』に収録されている同武功書では、越前椎の谷と記されている。

今井才右衛門が、北庄城で一揆勢との攻防戦を行った年次も不明であるが、［史料③］の内容との類似点が注目される。勝家が軍勢を差し向けた「しつ」が椎の谷とすれば、勝家の留守中に北庄城が一揆勢に襲撃され、激戦が行われたという点では、ほぼ一致している。

「山崎長門守家来侍帳」[33]

［史料⑥］　服部太郎右衛門尉申上分

一、私親服部忠右衛門尉本国尾張之者にて御座候、柴田家中ニ罷在候時、当国なへ谷表にて首一ツ取申候、其様子恒川源太郎・森吉蔵・渡部武右衛門尉被存候御事、

［史料⑦］　熊野兵右衛門尉申上分

一、私親熊野兵右衛門、本国越前之者にて御座候、（中略）其後越前柴田代ニ罷成候て、谷之城と申を城三郎兵衛親持申候、引セり手柄仕候、柴田殿より為褒美のし付拝領仕候、

［史料⑧］　笠井蔵人入道申上分

（前文略）

一、柴田家中ニ罷有候時、越前谷村と申城、当国より持申を柴田をしよせ責被申時、首壱ツ取申候御事、

［史料⑥］のなへ谷は、場所を特定できない。［史料⑦］と［史料⑧］はともに、［史料④］と同様に谷城攻略について記している。

しかし、年次は不明である。

横山家と山崎家の家臣団の武功書から、以下のことが記されていることが分かった。

一、大野郡では、北袋で一揆が蜂起し、放火して矢戸山に籠もり、織田方の日根野弘就兄弟との間で合戦となった。

二、柴田勝豊の豊原の居城に一揆勢が押し寄せたので、北庄城から柴田勝定が救援に向かった。

三、天正四年（一五七六）に、「しつ」へ柴田勝家が出陣している隙を突いて、一揆勢が北庄城を包囲し、本丸の塀まで迫った。しかし、城兵との激戦の末敗退した。また、年次は特定できないが、勝家が椎の谷出陣時にも、同じような戦いが行われた。

四、なへ谷で柴田勢は一揆と戦った。

五、北袋の谷城が柴田勢の攻撃で落城した。

一から五の中で、年次が記されているのは、勝家が「しつ」へ向かった天正四年の一揆勢の北庄城攻撃だけである。いずれにせよ、柴田勝家・金森長近の越前入部後も、一揆勢による攻撃があったことや、大野郡北袋の谷城が抵抗していたことが書かれているのである。次に別の武功書をみてみよう。

三　亀田高綱の武功書

初代新発田藩藩主となった溝口秀勝の甥の高綱は、柴田勝豊の家臣であったが、柴田勝家滅亡後に亀田姓に改め、浅野家に仕官した。

この高綱が浅野家家老だったことは、秋元泰朝等連署状（『浅野家文書』一二八号）や「自得公済美録」（『大日本史料』補遺一二編之三九、一五～二一頁）などで確認できる。しかし、現在広島には高綱に関する一次史料は存在せず[34]、管見では、伝存する高綱の書状の原本も、七月三日付のものしかない。（個人所蔵）

この高綱が作成したとする武功書の写が伝わっており、その中に、対越前一揆戦が書かれている。そこで、高綱の武功書について検討を加えてみたい。

桑田忠親氏の著書『日本人の遺言状』（創藝社、一九四四年）に、寛永五年（一六二八）二月三日付で作成された「亀田高綱書置」（亀田大隅一代働覚所載）が活字化され採録されている。（以下、「亀田大隅一代之働」とする）しかし、底本について、原本を採録したのか、桑田氏が解説で紹介している水戸徳川家に伝わる写本を東京大学史料編纂所が謄写したものを採録しているのかは不明である。

「亀田大隅一代之働」と文字や表記の異同があるが、ほぼ同じ内容を記した「亀田大隅一代之内働之覚」が、先に紹介した森田平次が編纂した『金澤古蹟志』巻三四の中に収録されているが、これも原本は不明である。

その他の亀田高綱の武功書は、筆写年代不明の「亀田大隅事記」（金沢市教育委員会文化課『金沢市文化財紀要49旧十村役亀田家調査報告書』「亀田家文書史料」五、一九八四年）や、旧加賀藩士青地采女が複写したものを幕府瓦解後に前田家に提出したと考えられる「亀田大隅守武勇事并感状」（金沢市図書館近世史料館所蔵）があるが、

この二書は高綱が与えられた感状の写も記載している。

また、高綱の弟半左衛門長吉の子孫で、新発田藩家老となった溝口長裕（一七五六生、没年不明）が作成した『家系譜附録』[35]には、三代将軍徳川家光の年寄（老中）土井利勝と酒井忠世に命じられ高綱が提出したとする戦功の書付や、高綱が与えられた感状の写を採録している。同書で長裕は、溝口家に伝わる一次史料も採録し綿密な考証を加えており、高綱の戦功書付・感状も写ではあるが、貴重な検討素材になると考える。

小稿では、桑田氏の著書の「亀田大隅一代之働」の対一揆戦記述部分を提示する。

［史料⑨］

一、柴田勝家越前入城之剋、国中一揆発、手向仕候付、佐久間玄蕃に先被申付候処、子息伊賀先陣を望、両人先懸被申候、其時大隅者、溝口半之丞ニ而、十六歳罷成候、惣手之先を懸、白木戸川原ニ而一番に馬上に而鑓付、首打取、深疵負候処、神谷太郎左衛門跡より乗来馬に被助乗、本陣へ帰候、神妙之由ニ而、柴田父子両判之感状有之事付、神谷儀は大隅舅加州中納言殿に居申候神谷信濃親にて候、右之働能存候者、京極殿に小足掃部と申者、前後能々可存候、

一、越前丸岡之城に者、柴田伊賀被居候、端午之為御礼、父子共安土え被致参上、私儀も供に罷越候、其跡に而一揆三千計に而城を取巻、二ノ丸迄乗取之由、安土え早馬注進に付、夜通丸岡に帰国候、父子勢二百六七十騎には不可過、五月十七日巳剋、敵三千之中へ乗込、神部内蔵と申者打死仕ニ付、父子共城え乗入被申候、大隅者町口に而敵二人と手合、一人は突伏、一人者追払、同十八日伊賀感状給候事、

一番目の記述内容にある勝家の越前入城（入部）の年は、天正三年（一五七五）である。では、この年に一揆が蜂起したのだろうか。戦場は白木戸川原とあるが、管見では場所を特定できない。

「亀田大隅一代之内働之覚」・「亀田大隅事記」・「亀田大隅守武勇事并感状」と校合すると、二番目の記述内容を含め表記の異同はあるものの、ほぼ同じである。その中で、「亀田大隅事記」のみが、戦場を白鬼戸川原と記している。しかし、同書に採録されている柴田勝家と勝豊が高綱に与えた感状の写では、「越前白木戸合戦之刻」と書かれているのである。

白鬼戸もどこであるか不明である。似た地名としては白鬼女があり、日野川中流域の越前南部に位置する。しかし、『家系譜附録』が採録した高綱が幕府年寄に提出したとする書付写では、この時の戦について、「柴田修理亮殿越前・加賀半国拝領之刻、加州手ニ入不申候、一戦之時、敵方大将若林長門守・次野寄兵庫千五百餘ニ而越前へ押寄セ申候、柴田三千餘ニ而出向、越前白木土之渡を隔一夜陣取申候」と書かれている。つまり、若林長門守・次野寄兵庫（洲崎藤八郎景勝カ）を大将とする加賀一揆勢が越前に攻め入ったので、柴田勢はこれを迎撃するため出陣し、白木土の渡を挟んで両軍は対峙したとある。

この書付写のように、勝家は織田信長から加賀半国を与えられた

とはいえ、加賀平定戦は容易いものではなかった。[36] しかも、同書では、加賀一揆勢に越前へ攻め込まれたと、柴田方の高綱が記しているのである。仮に、日野川中流域北岸まで加賀一揆勢が侵攻したとすれば、建設中の勝家の居城北庄城を突破したことになるが、さすがにそれほどの勢いはなかったと考えられる。両軍が対峙したとすれば、北庄を越えない九頭竜川下流域とみなすべきである。

白鬼女の戦いについては、別の亀田高綱の武功書「亀田大隅軍功之覚」（石川県立図書館所蔵『雑録追加』六に採録）に書かれている。同書は加賀藩の軍学者有沢永貞（一六三八～一七一五）が書写したものであり、「亀田大隅一代之働」の二番目に書かれた丸岡城の攻防戦を、天正六年（一五七八）にあったとし、その後に、「白鬼女合戦之砌、大勢ノ中へ押込、数十人なで切、勝家御眼前」と記している。

一方、白木戸の戦いについて「亀田大隅一代之働」・「亀田大隅一代之内働之覚」・「亀田大隅事記」・「亀田大隅守武勇事并感状」では、真っ先に敵陣に突入し首を打取ったが深手を負ってしまい、高綱の舅神谷太郎左衛門に助けられ本陣に戻ったとある。『家系譜附録』の高綱の書付写では、その時の様子がより具体的に記されている。それを要約すると、先駆を命じられた柴田勝豊に従い白木戸を渡河し、敵の物見か忍の者と遭遇したところを、鑓で倒し首を切り取る際に反撃され疵を負ったものの、後から来た神谷太郎左衛門に助けられて本陣に戻ったとしている。

「亀田大隅軍功之覚」以外の書では、柴田勝豊配下の部将として一番乗を果たし首を打取ったものの疵を負ったとあり、勝家の眼前で敵を撫切したとは書かれていない。しかも、この白木戸川原の戦いの時に高綱は一六歳であったと記されている。『家系譜』[37]（先に紹介した溝口長裕の『家系譜附録』は、長裕が作成した『家系譜』を補完したものである）には、溝口家の家系図が掲載されている。高綱に関しては、生まれた年は書かれていないが、一六歳で初陣、寛永一〇年（一六三三）八月一三日に七三歳で病没、と記されている。七三から一六を引くと五七であり、没年の寛永一〇年から五七年前は、天正四年（一五七六）になる。つまり、『家系譜』の家系図によれば、白木戸川原の戦いは、高綱が一六歳だった天正四年に行われたことになる。したがって、「亀田大隅軍功之覚」に記された天正六年の白鬼女の戦いでは、高綱の年齢は一六歳より上でなければならない。（『家系譜』の家系図による高綱の生年は、数え年（生まれた年の時点で一歳とする）を考慮し没年から逆算すると永禄四年（一五六一）となり、天正六年時の年齢は一八歳となる）

以上、高綱自身が体験したとする戦闘内容の大きな相違や年齢を勘案すれば、白鬼女の戦いがあったにせよ、白木戸の戦いとは、全く別なものであったと判断すべきである。

天正四年に越前一揆の惣老等が上杉謙信の出馬を懇願したことも先に触れたが、[38] その中で「重而信長出張候而、令乱邑、于今国不輒候条、各加州表江引退、時剋雖待申候、尾州勢依為勇兵、越前諸牢人・加州之士卒雖致武威之行、戦功未成候、御屋形様（上杉謙信）、非御出勢者、各難遂還国之望候」（傍線筆者）とあり、織田信長の越前再侵攻で加

賀に引き退いた越前諸牢人が加賀一揆勢と共に戦っているが、織田勢が強く苦戦を強いられていることを伝えている。そのうえで、謙信が越前へ出馬しなければ、還国の望みを遂げることはできないと訴えているのである。

惣老等の書状から、この時点で、越前諸牢人が加賀一揆勢の協力のもとで越前奪回を目論んでいたことが分かる。結局、同年に謙信の越前方面への出馬はなかったが、越前で一揆が蜂起している[39]。前節［史料③］の長屋吉右衛門の武功書からも、一揆蜂起が越前各地であったことを窺わせる。これに呼応して越前諸牢人・加賀一揆が越前に侵攻し白木戸川原で敗退していたとしても、問題ないだろう。

次に、［史料⑨］の二番目の記述内容をみてみよう。五月の端午の挨拶の為に柴田勝家・勝豊父子が安土の信長の下に参上し、これに高綱も随行していた。その隙を突いて、一揆勢三千程が丸岡城を包囲し、二の丸まで攻め入ったことが書かれている。この報告を受けた勝家父子は急遽夜通しで越前に戻り、五月一七日巳の刻に丸岡城を攻めていた一揆勢三千に対して突撃したとある。その際に高綱は、敵一人を突き伏せ、一人を追い払い、翌日に勝豊から感状を与えられたと記している。

この感状自体は、［史料⑨］には採録されていないが、『家系譜附録』・「亀田大隅事記」・「亀田大隅守武勇事并感状」には採録されている。文字の異同が多少あるが、内容はほぼ同じである。小稿では、『家系譜附録』採録の感状をみてみたい。

昨十七日、丸岡籠城後詰之合戦有之時ニ、町口にて、敵両人ニ合手組、一人ハ鑓付、一人ハ追払候段、重畳の働名誉ニ候、就夫為加増五百石宛行候并太刀一腰遣候者也、

五月十八日　　伊賀守（柴田勝豊）

溝口半之丞との

高綱は、この時は旧姓の溝口姓を名乗っており、溝口半之丞とは高綱のことである。この感状写に記された武功と、［史料⑨］の武功と内容は一致している。

さて、丸岡城の一揆勢三千と柴田勢との攻防戦がいつ行われたのだろうか。先に挙げた『雑録追加』六に採録されている「亀田大隅軍功之覚」では、丸岡城攻防戦は天正六年（一五七八）にあったと記されている。しかし、『信長公記』巻一一では、天正六年五月一三日時点で、信長は自身の播磨出陣を布告したが、京都・安土の大雨による洪水被害により、中止したと記されている。勝家父子が安土に大雨被害の見舞に行った可能性は否定できないが、信長の播磨出陣が中止されるほどの緊張した状況下で、少なくとも暢気に端午の礼に赴くことはないだろう。関連し前述のように、丸岡城の築城の年次を示す一次史料の存在は確認されていない[40]。

「亀田大隅軍功之覚」では、加賀河北郡森本の城に拠る加賀一揆の旗本亀田小三郎を降す際に、高綱が人質になったと記している。同じような内容が書かれているのは、「亀田記」（「越賀雑記抄」、『一向一揆と富樫氏』、石川県図書館協会、一九三四年）であるが、同書では高綱が小三郎の婿になったとあり、「史料⑨」とは全く異なる。さらに、人質になった件も、他の高綱の武功書では一切書かれては

いない。しかも、「亀田大隅軍功之覚」では、賤ヶ岳合戦時に勝豊方部将として戦った高綱の武功について「柳个瀬ニ而太刀打の高名、是ハ勝家御滅亡合戦故、証拠なし」と書かれているが、『家系譜附録』などの感状写では、「太刀打之高名、首一到来」と記された勝豊から与えられた感状写が採録されているのである。

以上のように、「亀田大隅軍功之覚」の記述内容は「亀田記」を除く高綱の武功書との相違が甚だしく、後世に創作された可能性が高く矛盾点が多い。したがって、丸岡城の攻防戦を天正六年と断定することには慎重を要する。しかし、年次は確定できないものの、高綱の武功書から丸岡城の攻防戦はあったのだろう。

前節［史料②］の広瀬民部の武功書では、勝豊の豊原の居城が一揆勢に攻撃されたことが記されているが、勝家・勝豊父子が安土に伺候した時とは書かれてはいない。丸岡城が既に築かれていたとすれば、豊原が丸岡城からさほど離れていない距離に位置していたとしても、勝家配下だった部将が丸岡城に関して、「豊原与申所ニ柴田伊賀殿住城被仕候」とは書かないであろう。これらを勘案すると、勝豊の居城が豊原城だった時に、一揆が蜂起し、さらに、丸岡城に移った以降に、勝家・勝豊父子が不在時に、一揆が蜂起したものと判断される。つまり、織田信長の越前再征後に坂北郡で少なくとも二度一揆勢が蜂起し勝豊の居城を攻撃したことになる。豊原城・丸岡城への一揆勢の攻撃は城を包囲するほどの規模であり、特に丸岡城攻撃時には三千もの兵力で二の丸まで攻め込んだとの記述が注目される。

四、まとめ

これまで、加賀藩家老家臣の武功書と亀田高綱の武功書に記されている、織田信長の越前再征後の一揆の動静をみてきた。以下に、これらの記述内容をまとめてみる。

織田方の部将が越前に配された後も、一揆勢の抵抗は継続しており、大野郡の一揆方の要衝北袋の維持だけではなく、柴田勝家の居城北庄城や柴田勝豊の居城豊原城・丸岡城を包囲するほどの勢いをもっていた。最終的に一揆は鎮圧されたが、勝家は加賀平定はおろか膝下の越前でも、不安定な状況に対処せねばならなかった。

小稿では、当該期の戦いを経験した武士の武功書という二次史料を基に分析を行ったが、記述された内容の年次比定など残された課題は多い。しかしながら、一次史料では、補いきれない越前一揆の抵抗継続の一端を探る手がかりとなるだろう。特に、北庄城の本丸や丸岡城の二の丸まで一揆勢が迫ったとすることが事実とすれば、天正三年の織田信長の越前再征時の殲滅戦で、本願寺の坊官・大坊主による越前支配は崩壊したが、一揆は一定の勢力を保持しつつ存続していたことになる。彼等が本願寺の指令下で蜂起したのか否かも含めて、今後、一層の検討が必要である。

注

（1）『信長公記』巻八

（2）「越前国相越記」（「山田竜治家文書」『福井県史』資料編3、以下『福井』資と略す）

（3）大廣克也氏の御教示による。

（4）「小嶋吉右衛門家文書」五号・「長勝寺文書」一号（『福井』資7）、なお、「長勝寺文書」一号五月二八日付北袋野津又在城衆中宛本願寺顕如書状を『加能史料』戦国XVI（一九二～一九三頁）では、天正三年（一五七五）と比定するが、「仍当山中之儀、いまに相拘候て、敵（織田信長）を支、おり〳〵ハ打出成其働由、忠節無比類候」と野津又に在城する一揆勢が織田勢と戦っていることが記されている。天正三年五月時点では、まだ織田勢は再侵攻していないので、この書状の年次は早くとも天正四年（一五七六）と比定される。

（5）味真野史跡保存会所蔵「小丸城跡出土文字瓦」（『加能史料』戦国XVI二三〇頁）、井上鋭夫『一向一揆の研究』六〇一～六〇三頁（吉川弘文館、一九六八年）、『福井県史』通史編2中世七七七頁、『福井県史』通史編3近世一　三八頁、杉浦茂「一向一揆文字瓦について―駒井氏への反論―」（『考古学ジャーナル』一五五号、一九七八年）、拙稿「一揆文字瓦の年代比定」（『若越郷土研究』四〇―六、一九九五年、同書で『武功夜話』を引用した部分は削除して訂正したい）

（6）「武州文書」（『加能史料』戦国XVI一九八～一九九頁）、同書状の年次比定については、神田千里「『越州軍記』にみる越前一向一揆」（『東洋大学文学部紀要・史学科篇』四四号、二〇一九年）、拙稿「本願寺・加賀一揆と上杉謙信―敵対から和睦・提携への道程―」（『戦国史研究』七九号、二〇二〇年）を参照

（7）「柴田義宣墓」（『越前国名蹟考』八一六～八一七頁、二書房出版、一九〇三年）、『勝山市史』第二巻原始～近世二一六頁

（8）「平泉寺落より地頭附覚」（「藤井寛治文書三号、『勝山市史』資料篇・第二巻村方1・勝山領）、同史料には流布本があり、翻刻本として松村家本「平泉寺落ヨリ以来地頭様歳代記」（『勝山高校紀要』五号、一九六〇年）がある。

（9）「柴田勝家始末記」の系図（『大日本史料』一一―四、三五六頁）では、義宣は勝家の甥となっている。しかし、『寛永諸家系図伝』・『寛政重修諸家譜』では、その名を確認できない。

（10）「建勲神社文書」（『加能史料』補遺Ⅱ一八四～一八五頁）、「齋藤報恩博物館所蔵文書」（『加能史料』戦国XVII一六〇～一六一頁）

（11）松浦義則「柴田勝家の越前検地と村落」（『史学研究』一六〇号、一九八三年、同著『戦国期越前の領国支配』戎光祥出版、二〇一七年に所収）、「織田期の大名」（『福井県史』通史編3近世一第一章第二節）

（12）「勝興寺文書」・「武家手鑑」・「林弘之氏所蔵文書」・「柿崎文書」・「吉川金蔵氏所蔵文書」・「相馬正胤氏所蔵文書」・「維宝堂古文書」（『加能史料』戦国XVI三〇三～三〇七頁）

（13）「森田正治氏所蔵文書」（『加能史料』戦国XVI三〇九～三一〇頁）

（14）「瀧谷寺文書」（『加能史料』戦国XVI三一五～三一六頁）

（15）「河上文書」・「歴代古案」（『加能史料』戦国XVI三二六～三二七頁）

（16）「栗林文書」（『加能史料』戦国XVI三一一～三一二頁）

（17）「吉江文書」（『加能史料』戦国XVI三二二頁）

（18）谷口克広『織田信長合戦全録』二二七頁（中央公論社、二〇〇二年）、同年五月三日に織田信長は、加賀侵攻時に忠節をつくすことを申し出た江沼郡の柴山長二郎に本領安堵を約束していることからも、越前再征で一旦は制圧した加賀南二郡の織田方の支配は不安定だったと判断される。「柴山文書」（『加能資料』戦国XVI三一四～三一五頁）

（19）三鬼清一郎「信長の国掟をめぐって」（『信濃』二八―五、一九六七年、同著『織豊期の国家と秩序』青史出版、二〇一二年に所収）

（20）註（14）の堀江藤秀書状以外に、註（4）、（5）、（6）「称名寺文書」（『加能史料』XVI二二七～二三〇頁）、「法雲寺文書」四〇号（『福井』資5）など

がある。

(21) 竹井英文「《史料紹介》 石川県立図書館所蔵「本多家士軍功書」」・同著「《史料紹介》 石川県立図書館所蔵「横山家士武功書」」・同著「《史料紹介》 石川県立図書館所蔵「山崎家士軍功書」」(『東北学院大学東北文化研究所紀要』四七号、二〇一五年・同四八号、二〇一六年・同四九号、二〇一七年)

(22) 註 (21) 竹井前掲論文「《史料紹介》 石川県立図書館所蔵「横山家士武功書」」

(23) 『信長公記』巻八

(24) 田中孝志氏の御教示による。

(25) 「顕如上人御書札案留」・「古文書集」・「大湊町振興会所蔵文書」(『愛知県史』資料編11織豊1八五五・一〇〇五・一〇〇七号)

(26) 『信長公記』巻一一

(27) 註 (4)、「稱名寺文書」九号 (『福井』資7)

(28) 註 (2)

(29) 『信長公記』巻一一、「上杉家文書」・「斎藤文書」・「斎藤報恩会博物館所蔵文書」(『富山県史』史料編Ⅱ一八九四・一九一〇・一九一一・一九一二・一九一五・一九一六号、以下『富山』と略す)

(30) 「楠文書」(『金沢市史』資料編2中世二　六七一号)、『信長公記』巻一三

(31) 「北国鎮定書札類」・「有沢家文書」・「最上記追加」(『富山』一九六九・一九八四・一九八五号)

(32) 「鷺森日記」・「安井健夫家文書」・「貞享二年加能越里正由緒記」(『加能史料』戦国Ⅶ二四〇～二四一頁)

(33) 註 (21) 竹井前掲論文「《史料紹介》 石川県立図書館所蔵「山崎家士軍功書」」

(34) 西村晃氏の御教示による。

(35) 『溝口半左衛門家文書』(福井県立歴史博物館寄託・個人蔵)

(36) 註 (18) 谷口前掲書一七七～一七九頁

(37) 註 (35)

(38) 註 (6)

(39) 註 (5)

(40) 註 (3)

[付記] 小稿作成に当たり協力・助言をいただいた、大廣克也氏・山崎英輝氏・赤城隆治氏に、末尾ながら謝意を表する。